



## 万葉の雑草

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 専務理事  
横山 昌雄

湧水で有名な柿田川に出かけたおりに、三島の楽寿園に立ち寄る機会があった。ここには「万葉の森」という万葉植物の名称と例歌の立札が設置されているこぢんまりした植物園がある。万葉植物の多くは木本科で、草本科は少なく、水草はほとんど無かった。名勝楽寿園の小浜池は既に渇水しているので無理もない。

万葉集には四千五百十六首の歌が集まり、数多の植物が登場する。そのなかにはヒエ、コナギ、オモダカ、クログワイなどの現代の田畑で問題問題となっている雑草もみられる。ただ万葉種はそれぞれ古名として登場するので、現在のものと同じである証拠は乏しい。

春霞春日の里の植ゑ小水葱 苗なりと言ひし枝はさしにけむ  
苗代の小水葱が花を衣に摺り なるるまにあぜかかなしけ  
以上の二首にはコナギ（小水葱）が登場する。ここでは水田雑草ではなく、食用の草として使われている。

醬酢に蒜搗き合てて鯛願ふ 我にな見えそ水葱の羹  
鯛が食べたいのに、なぎの吸い物など見せるな、と言っている。コナギは美味しいものと思われていなかったようだ。

君がため山田の沢にゑぐ摘むと 雲消の水に裳の裾濡れぬ  
この一首には「ゑぐ」を沢に摘みに行くところ。ゑぐはクログワイ、オモダカ、セリなどである説がある。摘むとあるので、万葉の時代には有用植物であったことが推測される。

うち日さつ宮の瀬川のかほ花の 恋ひ寝らむ昨夜も今夜も  
石橋の間々に生いたるかほ花の 花にしありけりありつつ見れば  
以上の二首の「かほ花」がオモダカといわれている。賀茂真淵の説である。「かほ花」は美しい花の総称で、この二首はカキツバタとの説もある。

時代は下るが、枕草子の六九段に「草は菖蒲、菰、葵がいとをか。神代よりして、さるかざしとなりけむ、いみじゅうめでたし。……。沢瀉（おもだか）は名のをかきなり。心あがりしたらむと思ふに。……。」とあり、オモダカの評価は芳しくない。清少納言は菖蒲、菰、葵を花の美しさを褒めるが、オモダカは名前だけを褒めて、美しくもないのに「面高（おもだか）と言う名を慢心していると皮肉っている。

とはいうものの、武家の時代になるとオモダカは武士たちには大人気で、オモダカの矢尻型の葉を模った紋章を陣羽織に織り込むほどである。戦を本業とする武士にはオモダカの矢尻葉が力強く思えたのであろう。江戸時代にはオモダカを模した家紋が多く現れ、武家以外の商人や役者たちにも拡がり、現代に至っている。

オモダカは水田ばかりでなく、あちこちで見かける。

私とイヌの散歩コースに、「おもだかや」の看板をかけた古風な花屋がある。上野の山の北側にある谷中霊園の一郭にお墓に供える花を扱う店である。明治中期まで上野の山の周辺は小川が流れ、田園地帯であったことから、「おもだかや」は周辺に生息していたオモダカに因んで命名されたと思っていた。ところが違っていた。名号の由来は浅草の芝居茶屋「おもだかや」で、歌舞伎小屋が浅草の猿若町から築地に移った際に、茶屋だけ上野の山に移ったそうである。また、テレビの中でもオモダカを見つけた。昨年の大相撲九州場所の千秋楽の結びの一番で、立行司木村正之介の装束にはオモダカの葉と花の丸い紋章が描かれていた。

オモダカは現在でも色々なところで活躍している。名誉のために万葉集の二首の「かほ花」はオモダカにしておきたいものである。

次の一首は万葉集の最後の載っている歌で、編纂者とされる大伴家持の一首がある。

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事  
新しき年、年の初め、初春と縁起の良い言葉を重ね、豊作を意味する白雪が積もることと併せて、新年に良い出来事が続くことを願って詠んだ一首である。

都から遠く離れた因幡の地で新しい年を迎えた宴席で降る雪を眺め、詠んだ歌で、万葉集の最後におくことで古豪の大伴氏が藤原氏の勢力に押され、衰退していることを憂い、一族の将来を万葉集の永久の繁栄に託したように思える。

この一首に詠っているように、あらゆる力を結集し、新しい西年を日本農業の飛翔の年としたいものである。